

## 「ジュージュー・ブランコ」

### 1.A さん

「最高気温 35℃以上の真夏日」なんて文字も見なれてきた今日この頃……。ぼくは真夏の炎天下の中、通勤路の途中にある小さな公園に来ていた。

### 2.B さん

ぼくは公園に何の用で来たのだろうか。  
公園には子供達がかけっこをして遊んでいる。暑くないのか心配する。

### 3.C さん

その時ぼくの目に飛びこんできたのは、真っ赤なブランコ。  
小さい時にはよくとなりのリンちゃんどどちらがよくブランコをこげるか対決を

### 4.D さん

してたっけ。  
リンちゃんはとてもかわいい女の子だけれど、ブランコをこぐときは気合を入れすぎて、口から「ジュージュー」なにかを出しているように見える。  
ぼくはそれを必殺ジュージューブランコと呼んだ。

### 5.A さん

リンちゃんがその必殺技をくりだすとき、ぼくはぐっと身がまえる。  
気合が入りすぎたブランコがどうなるか、みんな知っているでしょう？  
高く高くはねあがったブランコはもう制御不能。いつとんでいくかわからない。

### 6.B さん

ああー、ブーン、空に舞い上がったリンちゃん。体が浮いている！  
すずめが何かと寄ってきて、目があった。落ちるでもなく、ふわふわ浮いている。

### 7.C さん

も、もしかして、リ、リンちゃんは宙に浮く異能力の持ち主なのかっ！  
リンちゃんがいれば、見世物小屋でがっぼがっぼもうけられるぞ。

### 8.D さん

リンちゃんは僕を目を見てこう言った。  
「私、人の心が読めるの。君はそんな最低な人間だったのね。さようなら」と言ってリンちゃん

は宙に浮かんでそのまま宇宙へ還っていった。リンちゃんは宇宙人だったのだ！

## 「なつかしい狼」

### 1.Aさん

今日も仕事を終えての帰り道、ちょっと居酒屋に寄って一杯やろうかと思った時にあの鳴き声が聞こえてきた。「ウルルルーン」

### 2.Bさん

こ、この声は!? 幼少期に一度だけ聞いた動物の鳴き声だ。私はそれをウルルン狼と呼んでいた。私の心には常にウルルン狼がいて、私を勇気づけてくれていた。どこだ！どこにいる!?

### 3.Cさん

「ウルルン！ウルルン！」

すぐそこできこえる！やっぱり幻なんかじゃない。この声をきくと思い出す。やわらかなその感触。大きな瞳。ウルルン狼にもう一度会えたら、どんなにうれしいだろう。

### 4.Dさん

遠吠えをしてみた。「ワオ〜ン」

遠くまで聞こえるだろうか。

耳をすましていると、どこかからきこえるような、きこえないような。後ろに小さな犬がいた。

### 5.Aさん

なんてかわいらしい白い犬なんだ。

思わず犬の前にしゃがみこんで頭をなでようとした次の瞬間、犬が「ウルルルルーン」と鳴き、

### 6.Bさん

どこか遠くへ向かって駆け出していった。待って！俺はまだお前に自分の気持ちをちゃんと伝えてないんだ！俺は、俺は、ずっとお前みたいなカッコいい一匹狼になりたいと思ってたんだ！

### 7.Cさん

追いかけたがもうムダだった。狼の姿はすっかり見えなくなっていた。小さくなる背中をじっとみていると、一度だけ、ウルルン狼がこちらをふりかえった。そんな気がした。

「俺、がんばるよ」口に出してそうつぶやいた。

8.D さん

俺はウルルン狼の残像を胸にしまい、空を見上げた。晴れわたった空は遠く、白い雲はおおかみの形をしていた。

## 「天気の子」

1. A さん

ある日、天気をとてつも気にする犬がいました。犬が一番好きな天気は雨でした。雨は世界の雰囲気を変える、犬にとって楽しい日。

2. B さん

今日もざんざん降りの中、犬は水たまりの中を転げまわりながらびしゃびしゃになっています。そこに飼い主のキャサリンが

3. C さん

やってきました。

「あらあら、かわいいワンちゃんだこと。うちの子にならない？」

「キャウン？」

犬はぶるぶるとふるえ、キャサリンのきれいな服をびしょびしょにしました。キャサリンは目を丸くして

4. D さん

「お気に入りの服なのに！なんてことしてくれたの!？」

でも不思議なのは外は晴れているのに、この犬だけびしょびしょにぬれていること。スカートがおもたく、水たまりができています。

5. A さん

ここだけ降った雨なのか？でも犬はびしょびしょにぬれているスカートの色をうっとりと眺めていた。

「ワンツ」

スカートは一瞬で乾いた。

#### 6. Bさん

こ、この犬は、も、もしかして雨にぬれたものを一瞬のうちにかわかしてしまう異能力の持ち主なのかつ！コイツがいればコインランドリーでもうけられるぞ。

#### 7. Cさん

へっへっへっ、ワンちゃんこっちへおいで。

手をのばすと犬は異能力を発動させた。ひょうが私の顔面に当たる。痛い！

ひょうって漢字で書けない！辛い！よこしまな考えなんてもつんじゃなかった。

#### 8. Dさん

「痛い痛い！やめてくれ!!止まってくれ!!」

どんなに叫んでもひょうが止むことはなかった。

そのうち「カチン、カチン」という音だけがこだまする。いたくもない。ああよかった。

視界も真っ白になる。遠くで「キャウン、キャウン」と声がする。

### 「青い肉」

#### 1. Aさん

晩ご飯の食卓に着くと、青い肉が皿に盛られていた。俺…何かしたっけ…。心当たりがない。

「ね、ねえ、俺、お前に何かした？っていうかこの肉どうやって作ったの？すごくない？天才!!」

#### 2. Bさん

普通、「青」という色は食欲を低下させるものだけど、不思議とこの「青い肉」はとても美味しそうに感じた。

「だから、どうやって作ったんだよ」

きいても返事が返ってこない。

#### 3. Cさん

臭いをかいでみた。今まで嗅いだことのない不思議な臭い。迷いながらひと口ぱくり。

何の肉だ？と思った瞬間、気を失った。

#### 4. Dさん

……ハッ！

目をあけるとまぶしい光。手足を動かそうにも固定されているのか動かせない。

5. A さん

どこだ！？ここは！？青い肉がたくさんある。何の肉だ？もしかして・・・ゴクリ。  
そばには白衣を着た老人が立っていた。フォッフオッフオツ。仙人みたいなフォッフオッフオツだ。

6. B さん

「これはいったい何なのですか？この青い肉は」老人にはなしかけてもただ笑っているだけだ。  
そうならばと俺はたくさんある青い肉に手をのばした。  
こんなにたくさんあるのだからひと切くらいいいだろう。

7. C さん

そう思ったオレは、肉のかけらを口に入れようとした。  
でも持ったとたんに、それはドロっとした液体になり、手からこぼれてしまった。  
赤色になったえきだ。

8. D さん

青い肉が赤い液体に変わってしまったということは、安全から危険に変わったということか。  
次の瞬間、ぼくの体がとけて赤い液体に……